

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

相互尊重

慶應義塾普通部 2年 ^{きむら}木村 ^{しゅんすけ}俊祐

今では街の至る所にある多目的トイレ。僕が物心ついた頃には近所の公園に設置されていた。しかし、そんな多目的トイレだが、25年以上前には無かったようだ。ものすごい速度で社会に浸透させた「多様性」や「差別解消」。これは、年々改善が進んでおり、より色々な人が暮らしやすい社会になってきている。では果たしてその全てが正解であり本来あるべき姿なのだろうか。ここでは、多様性の問題点や過度な差別解消について指摘したいと思う。

まず、現代には多様性を履き違えている人がいるということだ。例えば、礼儀がなっていない人だ。僕はある運動部に所属しているのだが、同級生の中には先輩に対して敬語を使っておらず、いわゆる「タメ口」で話している人がいる。最近では厳しい上下関係を批判する声もあるが、僕は必ずしも上下関係をなくすべきだとは思わない。なぜなら、組織としてのまとまりを失うからである。そこで、上の者と下の者とでバランスをとる必要があると思う。一例として、鎌倉幕府の繁栄を支えた「御恩と奉公の関係」を挙げたい。簡単に言うと、家来が將軍のために戦い、將軍はその感謝を形として伝えるために土地を家来に渡したということだ。ここでは、お互いに尊重し合い、信頼関係を築くことが重要になる。上の者は下の者を尊重し理解してあげることで、下の者は上の者を尊敬でき、行動をしたいと思うだろう。つまり、上下関係というものは必要なことであり、それを維持していくにはお互いを尊重し合うことで自然と上の者に従うようになり、多様性を濫用した行為は減っていくのだと思う。

次に、過度な差別解消が最近増えていることについて言及したい。皆さんは「逆差別」という言葉を知っているだろうか。これは、マイノリティなどの社会的弱者への過度な優遇によりそれ以外の人々が逆に不利益になる、ということだ。最近国内で話題になっている例としては、大学受験の際に女性に優先的に入学させる、「女性枠」などの制度であり、理工系の学部などで増えているようだ。僕は、あまり好意的な印象をもたなかった。なぜなら、自分の性別は関係ないが、過度になってしまうとやはり男性に対しての逆差別になりかねないからである。確かに、理系の道に進んだ女性のことを「リケジョ」と

呼ぶなど、このような学部に入る女性は少ないのは事実ではある。だからこそ、「結果」ではなく「機会」を平等にし、世間が性別と学部を結びつけるような雰囲気を作ってはいけないのだ。そのためには、同様にどの学部に行く人もお互いに尊重し合うことが大切ではないのだろうか。

また、多様性の間違った認識は時に文化や個性を破壊する恐れもあるのだ。一昨年、カタールでサッカーのワールドカップが行われたのだが、日本でもかなり盛り上がった記憶がある。しかし当時、世界中のLGBTQ+の人々がそれに猛反発をしていたのはご存知だろうか。実は、カタールではLGBTQ+の人が結婚などをすると最長7年の禁固刑に処されるという法律があるのだ。確かに、これは多様性が広く認められるようになった世界においては時代遅れなものである。だが、重要なのは、カタールの文化を世界の型にはめるのではなく、やはりお互いが理解し尊重し合うことである。哲学系 You tuber の「rの住人ピエロ」さんはこう語る。「少数派が本当に求めているのは物質とか基準とかではなく、理解が欲しいんですね」と。

このように、様々な意見が飛び交うこの社会に必要なことは、上の立場の人や大多数の人が下の立場の人や少数派のある一つの基準に落とし込むのではなく、お互いの意見を尊重し合い、気遣うことが、この世界を持続可能にし、差別や多様性に関する問題を根本的に解決するために必要なことであると思う。皆さんももし気に食わないことがあっても、まずは相手を、納得はできなくても理解してあげることから始めてみませんか。